

(講演要旨)

性スペクトラムという新たな性の捉え方

九州大学名誉教授、久留米大学医学部客員教授
諸橋 憲一郎

わたくし達の身体は多様な種類の細胞によって作られています。そして、これらのほぼ全ての細胞は性を有していることが分かってきました。たとえば、骨格筋や肝臓を構築する細胞を雌雄で比較すると遺伝子の働きに差が認められます。つまり、同じ肝臓の細胞でも、雌雄で遺伝子の働き方が違うということです。この様な雌雄の差（性差）を研究するとき、わたくし達はオスの対極にメス（メスの対極にオス）を置き、二つの性を比較しながら性を理解しようとしてきました。つまり、対極に配置したオスとメスの間に深い境界を設け、性を二項対立的に捉えていたのです。しかしながら、ある特徴をもって雌雄を理解しようとしても、雌雄の判別ができない中間型の個体（細胞）や、時にはその雌雄の特徴が逆転した個体（細胞）が自然界には多く存在します。つまり雌雄を二項対立的に捉える研究では、雌雄の理解は困難であることが次第にわかってきたのです。

長年にわたって、このような二項対立的な雌雄の捉え方は研究の現場のみならず、広く社会に受け入れられてきました。しかしながら、色々なレベルのオスの細胞や色々なレベルのメスの細胞が存在すること、そして性のレベルは年齢に伴って、また女性の場合には性周期に伴って変化することなどが分かってきたことで、最近では雌雄を二項対立的に捉えるべきではなく、むしろ「連続する表現型」として捉えるべきであるという「性スペクトラム」の考え方が登場してきました。本講演では「性スペクトラム」という新たな性の捉え方について解説します。